

“ 残 業 ” を 退 治 す る

(株) アルティスタ人材開発研究所
玄間千映子

今、残業の取扱いが真剣に問われています。

問われているのは、残業代を支払うか否かではなく、その「残業」が組織と社員にとってどれほどの意味があるのか、です。社員が残業すると、組織には残業代の支払いが生じます。しかし、社員も自分の人生時間を使っていることになるわけで、よくよく考えてみると、「残業」というのはお互い、あまりよくないことのように思います。

そこで今回は、残業退治を考えてみました。

「スピード」チェックを試みよう

退治するには、仕事の仕方に工夫を加えることが必要ですが、工場のように機械が仕事の大部分を担っている場合は人が工夫できることは少ないので、今回はデスクワークの場合を考えてみましょう。

デスクワークの場合によくいわれることは、業務の効率化。でも、デスクワークは人と人の間で仕事をしているので、自分の業務スピードが遅いのか、早いのか分かりづらいものです。分かりづらければ、改善しにくく、工夫もしにくい。よって、「業務効率」とは、自分にとっての快適スピードが基準となってしまうがち。

自分がどうであるかの確認には、案外、簡単な方法でできそうです。まずPCで、入力速度の自己チェックを試みましょう。といっても、単純に打ち込む速さを競うものではありません。入力作業は、入力すべき言葉を頭の中で認識し、その文字を入力するのに必要な指の運動を決めることで、可能になっている活動です。ですから、まず「業務に必要な専門用語」をどれくらい知っているかが、入力速度に大きく影響してきます。次に、その「言葉が出てくる場面の適切さの判断」が効いていることが必要です。「業務の知識」ですね。

たとえば、お礼の手紙の文面は、「お礼」で終わることが必要で、「ご検討ください」など、お願いの言葉で終わることはあり得ません。議事録を打つのも、会議の時には議題に沿ったことが討議されるわけで、唐突に「どこかのレストランの食事がおいしかった」というような発言があるわけではないのです。

残業退治には、業務知識を充実させる

そのように、「言葉が出てくる場面」には適切さというものがあり、入力に際してもそういう判断が効いていると、次に入力する言葉が何かを推察しながら入力作業を行うことになるので、自然と「スピードが上がる」という現象となって表れてくるのです。

ところで、この適切さの判断ですが、日本語には語彙変換という作業が加わりますから、入力が的確である上に文脈との文字選択にも的確さを求められることになり、「その言葉が出てくる適切さの判断」は案外、ハードルは高いのです。このように業務知識の程度って、入力スピードと関係があるのですね。

そこで、自分がどの程度その力を備えているかの確認として、自分の部署から経営層に出す文書の原稿の入力テストがお勧めです。上職になればなるほど、言葉は専門化し、抽象的な熟語で埋め尽くされ、文脈に適した語彙変換も複雑になってくるものです。

業務知識の充実度は、自ずと業務改善のポイントを見つける目も養います。それは自ずと、自分の仕事を伸ばし、残業退治の目線となって日頃の業務を見直す力となるものです。「自分の時間を有効に！」。これ、残業退治のための標語です。

筆者紹介

玄間千映子 (げんま・ちえこ)



(株)アルティスタ人材開発研究所代表。國學院大学卒。米インマヌエル大学大学院卒後、米スタンフォード大学ビジネススクール修了。財団法人日本船舶振興会(現日本財団)役員、国会議員各秘書を経て1994年に前身の(株)アルティスタを設立し代表に。2006年現社名に改組。日本大学大学院非常勤講師、(財)港湾空間高度化環境研究センター監事などを兼任。著書に「ジョブ・ディスクリプション一問一答」「リストラ無用の会社革命」など。